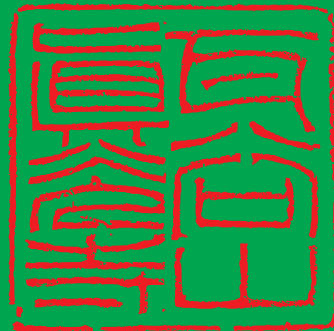




が ころ さん
瓦谷山だより

厳しい寒さも次第に和らぎ、間もなく、あらゆる生命の息吹を感じる季節がやってまいります。
春のお彼岸、皆さまのご参詣をお待ちしております。

十方三世一切仏

諸尊菩薩摩訶薩

摩訶般若波羅蜜



令和 8年 3月号

vol. 61

「あいさつ」

真光寺住職 岡本和幸

還暦過ぎから、たいした病気ではありませんが、病院通いが忙しくなってきました。友人との会話も自身の健康や、両親の介護、病気、葬儀の話が多くなってきた、年齢を重ねたことを実感しています。しかしこれも還暦を過ぎて今日まで生きることができたからこそその経験で、おもしろくまた有難いことだと思っています。

「世の中は食うてかせいで寝て起きてきてその後は死ぬるばかりぞ」 一休宗純

風狂の禅僧一休禅師の狂歌です。死んでしまえばみなおしまい、ということはおとしやる通りではありませんが、いつたいつ死ぬのか、どう死ぬのか、そのところが大きいなる心配事です。死んだらこの世では自分で何もすることもできませんし、おそらく何もわからなくなるのでしょうか。死んでしまえばそれで終わりとは思いますが、死んだ後が心配という気持ちも苦しみ悩みの一つではあります。誰しもその狭間で揺れ動いているのだと思います。

『歎異抄』に「善人なおもて往生す。いわんや悪人をや」という有名な言葉があります。この場合の「善人」とは、自分が良いことばかりしていると自覚している人のことです。「悪人」とは自分が悪いことをしていると自覚している人です。誰しも自分は悪いことなどしていないと思っます。しかし相手はそうは思わない場合も数多くあります。人は食わねば生きていけません。人間界の善が動植物界の善とはかぎりません。門外漢ではありますが、動物を神が人に与えた食べ物と位置づけるキリスト教は、他の命を奪わないことには生きていけない罪深き人間の後ろめたさを神の名において解消しようとしているのかもしれない。

今年も年明け早々からミサイルが炸裂する映像を見ることがになりました。世界中で自己中心的な善を振りかざして他者を殺戮する戦争や紛争が次々と勃発しているのを見るにつけ、人間とはつくづく愚かなものだと思います。自己中心的な善は必ず領土や権益などの欲望に紐づいています。数万人という人が欲望の下に殺されている現実に嫌悪感を抱くものの、欲望そのものは食うて稼ぐ原動力として誰しもが持っているものでもあります。

たとえば尖閣諸島や竹島など領土問題について過激な意見を持ち、勇ましいことを言ってしまう、ある意味他国を侵略している人々の心とさして変わらないのかもしれない。

『歎異抄』では、「どのように死ぬか」も「死んだ後どうなるか」も、生ある人間が欲望に基づいて夢想する心配事の一つだととらえています。「自分は普通に生きている」と思っている人も、欲望を自覚して「自分は悪人だ」と思っている人も、「南無阿弥陀仏」と唱えることで強欲から離れ、極楽に往生することができると説かれているのです。

それでは極楽往生とはどういうことでしょうか。それは「死ぬるばかりじゃ」ということです。死んでしまえばそれで終わりと思えば、「こうしてほしい、ああしてほしい」という欲から離れて極楽になる、ということかと思えます。この場合キーになるのは「南無阿弥陀仏」という言葉です。この言葉は「なまんだぶ」でも「南無妙法蓮華経」でも「無」でも何でも良いのです。

「莫妄想」（まくもうぞう・妄想するなかれ）という禅の言葉があります。現実離れた空想や未来への不安、過去への執着を捨て、目の前の「今」に集中せよという教えです。過去は妄想、未来も妄想、過去はすでに無く、未来は来るかどうか、何が起こるかは誰にもわかりません。

「妄想無き時 一心これ仏国土」 無業和尚

自分の欲のままに妄想から離れた時には心は仏国土、つまり極楽にいるというのです。「南無阿弥陀仏」は言葉を、坐禅は体を鍵にして、我欲の世界から莫妄の極楽世界へと入っていく教えなのだと思います。

戦争のみならず、地震や火事、水害なども続き、不安が世間を覆っているようです。それに伴って勇ましい言葉や、弱者に攻撃的になる言葉を聞くことも多くなりました。こういうときこそ、自らの欲を自覚し、自らの心を整え、自らの心の平安を念じて、生きていきたいものです。

西方極楽浄土を身近に感じる春のお彼岸、皆様のご参詣をお待ちしています。

合掌

令和8年春彼岸法要のご案内

3月20日(金・祝) 午前11時～縁の会法要/午後2時～檀信徒法要



毎年恒例の「春彼岸法要」を厳修いたします。
皆様のご参列を、山内一同お待ちしております。

※塔婆供養をされる方は事前にFAX・LINEまたは
お電話でお申し込みください。

※縁の会法要にご参列の方は、下記をご確認の上、
事前にお申し込みください。

「縁の会 春彼岸法要」お申し込みについて

下記をご確認の上、お電話またはLINE、メールにてお申し込みください。

- ①ご参列の人数 ②送迎の要・不要(お申込みの場合はお布施1,000円程度) ③お弁当の要・不要(お申込みの場合は
お布施1,000円程度) ④花とうばのお申し込みは同封の「花とうば供養申込書」をご利用ください。



正月御祈祷・修正会

一月一日から三日まで年頭祈禱を行いました。お正月らしい澄んだ空気の中、たくさんの方にお参りいただいて新しい一年のはじまりを仏様と共に迎えました。

三日の午後には檀信徒の皆様と修正会を厳修いたしました。一年のスタートにあためて手を合わせ、静かに心を調える時間となりました。

本年も気軽に立ち寄れるお寺として、皆様とご縁を大切にしていきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。



年末大掃除

昨年十二月、何回かに分けて年末の大掃除を行いました。年の瀬の慌ただしい時期ではありませんでしたが、縁の会会員や檀信徒の皆様にご協力をいただき、本堂はじめ各お堂、普段はなかなか手の届かない場所まで隅々と綺麗にすることができました。

おかげさまで、新しい年を気持ちよく迎える準備が整いました。お忙しい中ご参加いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

行事報告

あじさいロード完成顛末記 その七

平成八年、晋山結制しんざんけつせいという大きな行事を修行して、私は正式に真光寺の住職に就任することができました。一泊二日、二泊三日といった日程で四谷の東長寺に勤務し、帰山すると竹の伐採や草刈に精を出すという生活が続きます。

かつて外国の最新文化を日本に伝える役目を果たしていた寺院は、いつの間にか古いものを護る場所になってしまった。都市寺院はもっと積極的に人権や環境を守り、平和に貢献するべきではないか—そういう考えから平成元年竣工の東長寺の新伽藍は地下に現代アートのギャラリーを設けました。P3 アート&エンバイロンメントという企画集団が、「宇宙船地球号」という言葉をいち早く唱え、人類と地球の持続的共存を訴えたバックミンスター・フラーの展示や、環境問題を地球儀上に可視化したインゴ・ギュンター展、環境共生住宅展など、数々の展覧会を行っていました。

また私が担当していた東長寺文化局ではアジアの共生をテーマにした東長寺アジア祭りや、当時のワールドミュージックブームに乗った様々な国の音楽イベントなどを行い、大きな話題となっていました。

新しい寺院のあり方として脚光を浴び

た東長寺の試みでしたが、アートギャラリーの固定資産税だけで数千万円、電気代だけで毎月百万円以上、お布施で維持され生産性を持たない一寺院がこれらの活動を支え続けていくには自ずと限界がありました。文化事業も縮小・廃止を余儀なくされ、アートギャラリーは閉館、その場所を利用して位牌納骨堂型の生前契約個人墓を提供する「東長寺縁の会」を結成することになったのです。

平成の始め、バブル経済の頃は墓地不足が喧伝され、富士山のおもに広大な霊園が造成されるなど、乱開発による環境破壊が問題になっていました。一方で核家族化が進み、後継者不在や未婚の方が増える中で先祖代々のお墓を維持していくことが難しい時代に入りつつあるとも言われるようになりました。当時はまだ墓制についての伝統的な考え方が強く、縁の会のシステムも批判も浴びたのですが、いざ発足してみると、多くの方が理念に賛同し入会されました。位牌堂型と樹木葬型の違いがあるとはいえ、真光寺縁の会はこの東長寺の仕組みとポリシーを引き継いでいます。

文化活動を行いながらも私は、都心部に立地するにもかかわらず無料で使えるから人々は東長寺に集まってくるだけで、こ

が佛寺であるという意識はないままに利用しているだけなのではないかという疑問を拭えずにいました。しかし縁の会を始めると、祭りに参加していた人、イベントの来場者、坐禅会の参加者などが次々に入会してくれたのです。

東長寺の文化活動は、決して無駄なものではありませんでした。家に縛られた檀家制度ではなくハードルの低い受け皿があれば、人々の想いを受け止められる寺院になれるのです。そのためには日ごろの活動が大切で、ここはとても良いお寺だと思っていただけのような活動を行うことが肝心であると確信しました。檀家さんに限って信頼関係を築いている従来の寺院のあり方が社会の仏教全般に対する無知と批判を惹起じやうきしているだけで、世間がいうように利をむさぼり敷居を高くして嫌悪されているのならば、寺院はとうの昔に日本から消えているはずで、地域の中で地道に信頼を醸成し、尊敬を集める寺院や僧侶も決して少なくないとはいえ、現代においては少子高齢化や過疎化、宗教離れなどの理由から寺院が立ち行かなくなりつつあるのも事実です。公共財としての寺院の役割を果たすために大いにお寺を開き、財務なども公開し社会貢献していくことが、今後

文・住職 岡本和幸

生き残っていける寺院のあり方と思っています。

その後、都市部の墓制は急速に変化していきました。家制度による先祖代々型の供養から個人単位の納骨型・位牌堂型が主流になってきて、機械式納骨堂や手元供養、散骨型など新しい墓制の形態が人々に受け入れられ市民権を得るにしたがって東長寺縁の会は順調に会員数を伸ばしていききました。寺を会場として縁の会会員による自主的なサークル活動も行われるようになり、終の棲家と同じくする者同士の交流が盛んになるにつれて「寺友」「墓友」などという言葉が生まれ、当時の人気番組であったNHKの「ご近所の底力」という番組でも孤立する都会の人々の新しい縁の結び方として取り上げられました。

その当時は真光寺でも東京での活動の延長線として、また地域の人々になじんでいくために落語会を開催し、終わってから懇親会を行っていました。また東長寺の坐禅会の会員さんを集めて「一泊坐禅会」を行ったり、バリダンス教室の合宿を行ったり、田舎の寺ならではの活動を模索していました。しかし設備は貧弱で、本堂に雑魚寝するほか

ありませんし、入浴するにも小さな風呂場を順番に使ってもらうために時間がかかります。庭に穴を掘りお湯をためて露天風呂も造りましたが、そのときは喜ばれても皆さん二度とは来てくれません。このままではダメだと思い、建築素人の私やボランティアの方が作った回廊や倉庫などを壊してありったけの貯金をはたき、地元の大工さんのご協力で本堂の再整備につとめました。

明治時代に建てられた本堂は、このときの整備である程度の耐震力も増したかと思いましたが、^{わらふきぐね}藁葺屋根に鉄板を掛けただけで経年劣化が進んでいました。がけ崩れで埋まって掘り出したトイレは浄化槽がなく大きな土管が埋められているだけでしたし、先代の時代に素人が手作りの台所は傾き、春には室内に白アリが大発生する。このままでは維持管理が難しくなっていくことは目に見えていたのです。そこで不要なものを撤去して、新しい檀信徒会館を作りたいと考えました。とはいえ貯金はすでに底をついていたので、ご寄付を募るしかありません。勸募にあたっては檀信徒の方々に無記名アンケートをお願いして意見を求め、ほぼ全員が無条件に賛同してくださったのには感動しました。現在の食堂（寺務所棟）東に掲げられた寄付単がそのときのものです。

ここで問題になるのが崖条例です。旧

本堂の敷地を含め、真光寺の土地全体が建築不可の場所なので、裏山を削るか大きな擁壁を建てる以外に手がありません。ご寄付をいただいてもそれだけで終わってしまいます。現在調整池になっている隣地にあった田んぼを譲り受けることができたので、ここを使おうかとも思いましたが、猫の額ほどの建物しか建てられません。

考えあぐねた末に裏山全体を造成しようと思いつき、当時の東長寺住職^{たき}澤和夫^{さわわふ}師に借金をお願いしました。自分自身が東長寺で働いて返済するつもりでした。それを聞いた瀧澤師の答えは、「こんな場当たり的な計画では未来はない。もっと大きなお金を貸すので計画からやり直さないか」というものでした。「新しく作るなら地域に根差した寺でないと続かないし、共感も得られない。都会の寺には都会の寺の利点と役割があるように、田舎の寺にも田舎の寺の利点と役割がある。お互いが協力利用することでこれからの寺院としてできることがあるのではないか。和幸が都会の寺のように便利な寺を作りたいなら好きにやればいいが、田舎の山寺を作りたいなら協力する」。瀧澤師の提案を受け、私は肚をくくりました。

それから東長寺が培った人脈の建築家、ランドスケープや、墓地開発、生物の専門家などの人々が、徹底的にこの地を調査してくれたのです。出来上

がったレポートはA3判百ページにもなり、歴史、文化、生態系、植生などあらゆる事項を網羅し、この地になじむ伽藍の設計も数例提示されていました。ちなみに現在の伽藍の基本設計はCGで作られています。現場の風景に伽藍を入れて景色に馴染むように計画されました。この調査が始まってから、東長寺関係者のご紹介で大学の教授やゼミ生なども真光寺で合宿するようになり、その際に寺から一・五キロ奥の谷にある谷津田は内房地域で数少ない昔の姿と生態系を保持している素晴らしい場所だと指摘されたのです。その場所ではゼミ生たちの調査が行われ、里山の植生や生態系などは卒業論文のテーマとなったりしました。



開墾を始めた棚田。この奥に14段の棚田が続く。

その谷の西側には大規模な土砂採集場があります。当時は山砂を運び出すだけでしたが、その後空いた土地に建設残土が運び込まれて、元の山より高い山が築き上げられていきます。お寺の前の細い生活用道路にダンブが数珠つなぎになり、山は削られぐみが捨てられてゆく光景は目を覆いたくなるものでしたが、それさえなければ穏やかで、静かで、緑豊かな素晴らしい場所です。ゼミの学生たちも感じるところがあつたのでしよう、荒れていく田んぼを再生して稲作を体験してみたいと言いつ出したのです。耕作放棄されて荒廃し、いつ埋め立てられてもおかしくない棚田を護ることは、地域の誇りと、静けさ、緑を守ることだと考え、檀家さんのご協力で田んぼを入手して再生に取り組むことになっていきました。

実を言うと、私は奥の谷に行くつもりはありませんでした。なぜかといえば蛇が多数生息しているからです。生家のお寺には石垣があり、カラス蛇という大きな蛇がたくさん住んでいて、子供の頃から大の苦手だったのです。その蛇嫌いは冷や汗・脂汗を我慢しながら三日間インターネットで蛇の映像を見続けて克服することができました。このとき一步を歩み出す勇気がなければ、アジサイロードはできていなかったかもしれません。

つづく

授戒とは何か…

お釈迦様は、私たちが日々の生活の中で煩雑になりがちな心をととのえ、心豊かな生活を送れるよう、「戒律（かいりつ）（日常において守るべき規律）」をお示しになりました。仏教に帰依（きえ）するということは、二千五百年にわたり相續されてきたお釈迦様のお悟りの内容と、そこから導き出された戒律を理解した上で、自身の生き方として実践していくことにほかなりません。

曹洞宗の大本山である永平寺と總持寺で厳修される「授戒会（じゆかいえ）」では、七日間という長期にわたり禅宗の作法に則（のっと）った修行生活を経たうえで戒法を受け、あわせて仏弟子になった証としてのお名前である「お戒名（かいなま）」をいただくこととなります。真光寺では、縁の会会員の皆様を対象に、毎月の七日法要のなかで「授戒式（じゆかいしき）」をご修行いただいております。

■授戒で受ける戒法とは

最初に「三帰依（さんきえ）」をお唱えし、仏・法・僧の三つをよりどころとすることを誓います。続いて、清らかな生き方を願う決意を示す戒「三聚淨戒（さんじゆじようかい）」、さらにその教えをより丁寧に展開し、心をいさめ、行いをいさめる十箇条の「十重禁戒（じゅうじゅうきんかい）」をお唱えします。

これら合計十六の戒法（十六条戒）は、日々の私たちの暮らしの中で、心を豊かにする「生き方のヒント」でもあります。

■仏弟子の証である「お戒名」

お戒名は、亡くなった後につけられる名前と思われがちですが、お釈迦様の教えを受け、これからの生き方を仏弟子として歩んでいくことを誓った証としていただく事が本来です。その際にあわせていただくのが「お血脈（おけちみやく）」です。お血脈とは、お釈迦様から代々の祖師を通して、今を生きる私たちへと受け継がれてきた仏の教えのつながりを示した大切な証です。お血脈に連なることで、私たちは決して一人ではなく、多くの



お血脈

いのちと教えに支えられて生きていることに気づかれます。

お戒名とお血脈は、後生での幸せを希（ねが）うのみならず、今この瞬間から、よりよく生きる決意の証となるものです。その意味で授戒は新たに戒を受けた人を応援すると同時に自らを省みる行持でもあるのです。

■授戒とは、心の示標

以上のように、授戒で受ける戒法は深い信仰に根ざした生活を送る決意を促す教えです。仏教の智慧を日常生活に取り入れる事で、これからの人生をより豊かな心で生きていくための実践的な心の示標となります。

七日法要

真光寺では、毎月七日に縁の会会員様の月霊供養の法要として「七日法要」を執り行っています。この法要のなかで、授戒式を行なっています。未受戒の会員様はもちろん、既に受戒された方もどうぞご参列ください。授戒式は仏教徒として心新たに日々を送るための誓いの場でもありますので、何回ご参列いただいてもかまいません。毎月欠かさずにご参列される熱心な会員様もいらつしやいます。皆様が一日でも多く、晴れやかな気持ちで日々をお送りできる事を心よりお祈り申し上げます。

※ 文中「授戒」の「授」は戒をさずける側、「受」は戒を受ける側を表しています。



一緒に十六条戒をお唱えいたします。



住職よりお血脈をお授けいたします。



お焼香にお進みいただきます。

【連載】上総自然学校フィールドの希少な生き物たち 第十八回 エビネ

文・大島 健夫

山地や丘陵地の落葉樹林の林床に生育する代表的な野生ラン、エビネ。川原井でも、ゴールデンウィークの頃になると、谷津の奥のほの暗い森の中で群落をつくっているのを見ることができま



2003年刊行の『千葉県植物誌』によると、千葉県で記録されている野生ランは65種類で、街中の植栽などにもいっぱい生えているネジバナから、日本国内どころか世界でも千葉県にしかない、イコールこの宇宙で千葉県にしか存在しないという超珍品のアワチドリまでいろいろありますが、エビネはその中でも広く一般に知られ、流通しているもののひとつでしょう。たおやかな花に似合わない「海老根」という無骨な名前の由来は、ごつごつとした根茎がエビを思わせる形状をしているからです。日本列島以外では、朝鮮半島と中国南部にも分布しています。エビネは現在、環境省のレッドリス



トでは「NT（準絶滅危惧）」にランクされ、また沖縄県を除くすべての都道府県のレッドデータブックに何らかの形で記載されるほど、すっかり希少種となつてしまいましたが、かつては北海道から南西諸島までどこにでも見られる普通種でした。その減少要因は、野生ランであるものの、あの「鑑賞目的・園芸用としての採掘」です。実際のところ、日本全国で数多くのラン科植物を絶滅の縁に追い込んでいるのがこの人為的な採掘というやつで、環境省のレッドリストには、なんと日本中の全野生ランの七割もの種が掲載されているのです。エビネに関して言うと、その採掘のピークが来たのは1980年代でした。エビネブーム、エビネバブルとさえ呼べる状況の中、日本中の山野でエビネは掘られまくり、販売されました。しかしウイルスに感染しやすい

エビネは、かなり慎重に管理しないとすぐに花や葉に斑点ができてたりしてしまい、美しさを失ってしまうのです。野生ランを素人が

育てるのは実際のところかなり難しく、例えばキンランなどは、腐生菌と共生しているので、花が咲いているのを待つて帰つて庭に植えても絶対に育ちません。鬼神のような技術のある人がやつても、三年もてば御の字です（結局、枯らすために持ち帰ることになります）。成長が遅く、繁殖力が低いランの仲間には、ぼこぼこ掘り取られていくと、群落が元の状態に戻るのに大変な時間を要します。知識も愛情もないままに、「美しい花を見たい、手元に置いておきたい」という欲望だけで山からランを持つていくのは、長期的にみると誰一人として得をしない、たまたえようもなく愚かな行為なのですが、残念ながら、かつて日本中の人が狂乱的にそれを行った時代があり、現在でも各種野生ランの盗掘は後を絶ちません。こうした問題を語る際、論文や新聞・雑誌等の記事には、「山野草愛好家による採取」といった言葉がしばしば用いられます。でも、まさにその山野草を愛好しているはずの人たちがその絶滅に大いに手を貸してきたというその皮肉な結果は、果たして愛好とは何なのかということを私たちに考えさせる材料そのものになっています。

山の中でエビネや、そのほかの野

生ランを見つけても、「わー、家に持つて帰ろう」というのは、もうやめにしましょう。この国の里山の自然は、そして、現在の野生ランの生息状況は、もうそれを許容できる状態ではないのです。美しい花は野で見ると、それが一番です。持ち帰らなければ、来年もまた見られるのです。いつまでもずっと見られるかもしれないのです。

エビネ
Calanthe discolor
ラン科
千葉県レッドリスト・D（一般保護生物）

おおしま たけお

詩人。1974年千葉県生まれ。詩の朗読の日本選手権・ポエトリースラムジャパン2016優勝。パリで開催されたポエトリースラムW杯で準決勝進出。一方でネイチャーガイドとしても活動。千葉市野鳥の会会長、日本トンボ学会会員。環境省希少野生動植物種保存推進員。近著「擬態する生物のきもち」（メイツ出版）好評発売中。

【連載】西上総風土記 第六回

馬のある暮らし — 馬匹文化と西上総② —

文・井口崇

新春馬囀

年末から年始にかけては、今年の干支「丙午」に関する話題が多くのメディア等で取り上げられていた。正月らしく開運・パワースポットとして紹介されていたものが多かったが、神馬を有する神社や流鏑馬の行事なども取上げられていた。漲る活力？とまではいかないが、新年早々の私に行動力をもたらし、人・人・人であふれる東京・台東区・かつば橋界隈へと誘ったのは、矢先稲荷神社拝殿の格天井画であった。これはいくしかない！とばかりに、愛馬ならぬ愛車を駆った。さすがに丙午！いいぞ！！



写真1 矢先神社の格天井画

この神社の格天井画は馬と人の歴史—

日本の乗馬史—がテーマになっていて、1000枚の馬の絵が描かれている（写真1）。それにしても何と参拝者の多いことか。皆天井を見上げてスマホで、パシヤ!!パシヤ!!。私も人込みの間隙を縫って、パシヤリ！

拝殿奥から入り口にむかって、古代〜明治・大正・昭和に至る各時代の馬と人物の姿が、時系列で配置されている。源平の合戦や信玄VS謙信の川中島の戦いの場面などが色鮮やかに描かれている。それぞれの時代の馬具・馬飾りや人物の装束も精緻極まりなく、圧巻である。作者は、戦後から昭和の中頃にかけて活躍した日本画家の海老根俊道画伯。同社は浅草名所七福神の一つで、福祿寿を祀っている。機会があれば、訪ねてみてはいかがか。—また前置きが長くなつた—

百済馬来る

本州における最古の馬牧（馬を飼いで育てた放牧地）は大阪平野の東部（大阪府四條畷市周辺）で発見されている。葦屋北遺跡では、5世紀の初め頃から馬匹生産が継続していたらしい。そこからは陶質土器（朝



写真2 埋葬された馬の全身骨格—
「大阪府HP」
「大阪府HP」
「大阪府HP」

鮮半島製の土器）、韓式系土器（渡来人やその子孫が製作した土器、製作技法や器形などに渡来的な要素が強く表れている）、

製塩土器、木製の鞍、鍔、轡等の他、多くの馬骨、馬歯、埋葬された馬の全身骨格（写真2）、馬を海外から運んできたと考えられる準構造船（本格的な構造船に対して骨組みなどが簡単な構造の船）数艘の部材などが発見された。百済からの馬と共に渡

来した人々が定住し馬の飼育・生産を始めたことを示す遺跡だ。葦屋北遺跡の位置は、古代の河内湖に近い場所にあり、馬の飼育には欠かせない牧草・穀物・塩の調達が可能であった場所である。古代の国際港でもあった難波津*にも近く、大和川や淀川を遡れば、大和

にも通じる交通の要衝である。こうした交通の要衝でもあり、穀倉地帯でもあり、塩の確保が可能な場所が選ばれて、馬の生産が始まり、畿内の周辺地域へと広まっていたのだ。

*難波津（なにわづ）

古代日本で最も重要であった国際貿易港。遣隋使・遣唐使の発着地、外国の使節の到着地として迎賓館なども置かれ栄えた。日本の玄関口であった難波津は、瀬戸内から河内湖への入り口に位置した。『日本書記』や『古今和歌集』にも登場している。

古代国家を支えた馬

馬のある暮らしは、ヤマト王権と通じた各地の支配者層の権威・権力の象徴ともなりながら、急速に受け入れられていった。5世紀以降、日本各地の古墳から多数の馬具や馬形埴輪が発見されているのは、地域の支配者層が馬匹文化を受け入れたことを示している。そして次のような状況を生みだしていった。①馬は、戦のかたちを大きく変化させた。騎馬戦術は移動力・攻撃力を飛躍的に高め、ヤマト王権の軍事的優位を生み、勢力範囲の拡大・国家統合の推進力となった。②馬は、勢力が及んだ地方と中央を結ぶ、交通・物流・情報伝達のネットワーク形成を可能にした。③馬は、農耕や運搬も飛躍的に発達させた。馬によってより広範な山野の開拓も行うことができた。

様々な古代のインフラ整備もまた進んだのである。

今でいうと馬は戦車であり、トラックであり、トラクターでもあったと言えるだろう。そんな、馬が当時の社会を革命的に変えてしまったのである。圧倒的なパワーとスピードを持つその特性から、神の乗り物としても扱われるようになり、古代の国家的祭祀や行事でも多用される神聖な動物になっていったのである。

駅路と伝馬

7世紀中頃になると、中央政権は、畿内と七道諸国（東山道・東海道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道）に駅路と伝路という官道を敷設して、中央と地方を結ぶ交通・物流・情報伝達ネットワークの整備をすすめた。駅路は、計画的に建設された古代道路で、中央と地方の国府と国府の間を最短距離で結ぶ、メインルートとなつたハイウェイである。駅路には4里（約16km）毎に駅家が設けられ、駅馬5〜20匹が置かれて、緊急事態の報告・公文書の速達・外国使節の送迎用に用いられた。伝路は、地方にあった豪族支配地間の連絡路を整備し、郡家（郡役所）と郡家の間や国府を結んだ道路である。伝路は、中央から地方に派遣される役人の移動や宿泊、郡家や国府に集

める税物の輸送に用いられた。郡家に付属する厩には伝馬5匹が置かれた。

『延喜式』（平安時代につくられた法令集）を参考に計算すると、各道の駅家に置かれた駅馬は4000程度。郡に置かれた伝馬の数は3000程度であつただろう。

つまり、駅路と伝路に馬と人を配備して、リレー方式で物資や情報を運ぶ古代の交通システム（これを駅伝制という。私たちが知る「駅伝（EKIDEN）」はこれに由来している）を稼働・維持していくには7000匹程度の馬が必要だつたということになる。

そのほかにも、軍事行動の際には軍馬（騎馬用馬・物資輸送用駄馬）が必要であつたし、官道の建設と維持管理、国府や国分寺の建設、たびたび繰り返された宮都の建設や遷都など、国家的なプロジェクトには膨大な数の馬が必要だつたのだ。

東国の馬

では、こうした国家的な馬の需要を、いったいどこが支えていたのか。畿内周辺の馬牧だけでは到底まかないきれない数であることは、先に述べた駅馬・伝馬の総数からも明らかだ。7世紀以降、中央政権が駅路・伝路を全国に張り巡らせると、馬は単なる軍事・運搬の手段ではなく、国家の血

流そのものとなった。情報を運び、人を運び、税を運び、そして国家の威信をも運ぶ。馬なくしては、古代国家の行政は一日たりとも成り立たなかつたのである。

その膨大な馬匹需要に応えるため、中央は早くから東国に目を向けていた。東国には放牧に適した広い原野が多く、渡来系の技術者たちがもたらした飼育・調教・馬具製作の技術が早くから根づいていた。気候は温暖で、牧草や、塩の確保も容易で馬牧の経営に必要な条件が揃っていたと言えるだろう。さらに、東山道・東海道という主要駅路が整備され東北へと延びるにつれ、馬の供給地としての役割はますます強まっていく。

東国の馬は、単に数が多かつただけではない。強健で持久力があり、山野の多い日本列島の地形に適応した小型の馬は、騎馬戦にも、運搬にも、農耕にも使える万能型であつた。こうした馬を大量に供給できる地域は、実は日本列島の中でも限られていたのである。東国は、まさに国家の馬資源を支える「馬の国」として形成

されていった。そして、その東国の中でも、房総は重要な位置を占めていたのである。

房総の馬への序章

房総は、三方を海に囲まれ、広い台地をもち、温暖な気候であるという地理的な特性をもっている。この地は馬の飼育にきわめて適していたので、古代から牧が多く置かれた地域であつた。上総・下総には、古代国家が設置した官牧が集中し、馬の生産・供給の拠点となつていたのである。

房総の地に広がった馬匹文化は、単に馬を育てただけではない。馬を祀る信仰、馬を使った祭礼、農耕や運搬、そして馬を通じて形成された地域社会の姿が、今も各地に残っている。

古代国家の巨大な馬需要と、房総の地理的特性が結びついたとき、房総は東国の中でも特別な「馬の文化圏」として形づくられていったのではないかと思える。

次回は、この房総に息づく馬匹文化の実像をたどり、武士団の成長などを垣間見ながら、西上総の馬のあるくらしと地域特性に迫ってみたい。

いぐち たかし

1956年和歌山県生まれ。
前 袖ヶ浦市郷土博物館長
現 和洋女子大学非常勤講師



写真3 木札に描かれた騎馬像
弓を携えた人物が疾走する姿が
描かれている
—東京・足立区伊興遺跡出土—
『馬と古代社会』（2021）より

百 回 忌 昭 和 二 年	五 十 回 忌 昭 和 五 十 二 年	三 十 七 回 忌 平 成 二 年	三 十 三 回 忌 平 成 六 年	二 十 七 回 忌 平 成 十 二 年	二 十 三 回 忌 平 成 十 六 年	十 七 回 忌 平 成 二 十 二 年	十 三 回 忌 平 成 二 十 六 年	七 回 忌 令 和 二 年	三 回 忌 令 和 六 年	一 周 忌 令 和 七 年
---------------------------------	--	---	---	--	--	--	--	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

令和八年の年忌法要のご案内です。
ご法事のお申込みは、お電話等
お願いいたします。
ご法事にご持参いただくものは以
下の通りです。

○ご自宅用のお位牌

（ご自宅用が無い場合はお寺で紙の位牌をご用意いたします。）

○遺影

○供花（生花）

（お寺で）用意する場合は、一対五千円お納めください。）

○お供物

(お寺で)用意する場合は、二千円お納めください。)

○外墓地用卒塔婆(三千円)・縁の会花
とうば(二千円)

○お布施
(三万円～五万円程度。)

ばい か りゅう えい さん か えい か
梅花流 詠讃歌(ご詠歌)練習

— 声を合わせ、心を調えるやさしいひととき —

「詠讃歌」とは、仏さまへの讃仰心や亡き人を偲ぶ心を詞にあらわし、音楽に乗せてお唱えするものです。曹洞宗の詠讃歌は「梅花流 詠讃歌」と呼ばれ、柔らかに穏やかなメロディが特徴です。当山では月に2回練習を行っております。現在講員は6名。落ち着いた雰囲気の中で、無理のないペースで練習を重ねています。「歌に自信がない」「覚えられるか不安」という方も何度も繰り返す中で少しずつ自然に身についていきます。



上総アカデミアホールで開催された「第22回梅花流千葉県奉詠大会」に参加した際の様子。

日 程：2月 4日(水), 18日(水) / 3月 4日(水), 18日(水) / 4月 1日(水), 15日(水)
5月 6日(水), 20日(水) / 6月10日(水), 24日(水) / 7月 8日(水), 22日(水)
各日とも午後3時～午後4時30分 参加費無料

【送迎のご案内】

真光寺と駅、バスターミナル間の送迎もありますのでご希望の方は裏表紙をご参照ください。お布施 往復1名様 1,000円程度

お布施 往復1名様 1,000円程度

ラインご利用いただけます [ご登録用QRコード](#)➡

ご祈祷、ご法事、各行事、塔婆、住所変更等のお申し込みお問い合わせは真光寺LINEでもお申し込みいただけます。
ID検索：shinkoji634



行事予定 | どなたでもご参加いただけます。

坐禅会

初心者の方でも無理なく坐禅を体験いただけるよう、真光寺の僧侶が丁寧にご指導いたします。椅子を使っての坐禅も可能です。

時には喧噪から離れ、静寂のなかに身をつつみ、仏祖正伝、曹洞宗の坐禅体験はいかがでしょう。

※初めての方は坐り方の御案内をいたしますので、午後2時30分までに寺務所へお越し下さい。

日時：毎月 第2・第4土曜日
午後3時～午後4時30分



慈嶽堂1F 坐禅堂

お布施：500 円程度
※予約不要

写経会

祈願や供養、また精神修養などのため、お経を書写しませんか。夕照庵(小書院)にテーブルと椅子を置きました。ゆったりとした静かな空間で、心を整えて写経ができます。

※道具は用意してありますが、ご持参されても結構です。

日時：3月 7日(土) / 5月 7日(木)
5月26日(火) / 6月 7日(日)
6月29日(月) / 7月23日(木)
全日とも午後1時～午後2時30分

お布施：1,000 円程度
※要予約



夕照庵



【その他のどなたでも参加できる行事】

行事名	日程	時間	費用
精進料理と 聖典講読の会	5月26日(火) / 6月29日(月) / 7月23日(木)	午前11時～ 午後2時30分	お布施 3,000円程度
仏像彫刻教室	毎月 第1・第3水曜日 ※初回の方は要事前申込 お問合せは仏師 鈴木先生まで TEL. 0438-63-2848	午後1時30分～ 午後4時30分	4,000円

【檀信徒様対象】

花まつり檀信徒総会

お釈迦様の誕生をお祝いし、法要後に檀信徒総会を行ないます。当番地区：台

日時：4月5日(日) 11時～

【縁の会会員様対象】

七日法要

11時より授戒式・月例供養法要。昼食を挟み、午後は坐禅・写経いずれかの修行をお選びいただけます。4月の午後の行事は、植樹祭を行います。年に1度だけ開催するこの植樹祭では、真光寺でご用意した苗木からお好きなものを選び、ご自身の区画に植えることができます。

7月の盆施食法要の詳細は次号6月発行の瓦谷山だよりに掲載いたします。

日時	3月 7日(土) 午前11時～
	4月 7日(火) 午前11時～ ※午後は植樹祭
	5月 7日(木) 午前11時～
	6月 7日(日) 午前11時～
	7月 7日(火) 午前11時～ ※午後は盆施食法要

※要事前申込

※午前、午後の方のみの出席もできます。

戒名を考える会 ※縁の会会員 特に未受戒の方 ※要事前申込

午前中は戒名の意味や仏教の概略のお話、精進料理の昼食をはさみ、午後は住職とともに漢和辞典を引きながらご自身の戒名を考えます。

日時：3月6日(金) 午前11時～午後2時30分
参加費：3,000円(昼食付)
定員：10名 ※持ち物：漢和辞典

真光寺団体参拝旅行のお知らせ

旅行日程

令和8年6月1日(月)～3日(水)

- 1日 ● 東京ー永平寺
永平寺泊
- 2日 ● 永平寺ー總持寺祖院
一和倉温泉
和倉温泉旅館泊
- 3日 ● 旅館ー金沢ー東京

【永平寺代理供養のご案内】
旅行に不参加の方も、永平寺での供養を承ります。事前に故人の戒名・お名前をお預かりし、法要にて回向いたします(供養證発行)。
お布施目安…一霊につき二万円
申込締切…四月末日



- ・ 永平寺宿坊に泊まれる最後の機会*
- *宿坊「吉祥閣」が取り壊しの予定
- ・ 永平寺にて坐禅、供養
- ・ 能登、總持寺祖院訪問

永平寺団参旅行は、数年に一度だけ催行する特別な機会。毎回初参加の方も多く、同じ修行の時間を過ごすことで、新しいご縁が自然と結ばれます。住職、僧侶がご案内します。お一人でも安心してご参加いただけます。
参加費／一名様 九五〇〇〇円(先祖供養お布施含む)
人気企画につき、定員まで、あと十名程度。

数年に一度の特別な訪問。毎回初参加多数。
大本山永平寺団参。

送迎のご案内

【午前】

□電車の方

- ・ 上り電車の方(君津発千葉行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」10時05分着
- ・ 下り電車の方(快速君津行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」10時11分着

□バスの方

【土日祝】

- ・ 品川発9時00分→袖ヶ浦BT 9時52分着
- ・ 横浜発9時00分→袖ヶ浦BT 9時46分着
- ・ 川崎発9時15分→袖ヶ浦BT10時17分着
- ・ 東京発9時10分→袖ヶ浦BT10時05分着

【平日】

- ・ 品川発9時00分→袖ヶ浦BT 9時52分着
- ・ 横浜発9時00分→袖ヶ浦BT 9時46分着
- ・ 川崎発8時30分→袖ヶ浦BT 9時27分着
- ・ 新宿発8時30分→袖ヶ浦BT 9時30分着
- ・ 東京発9時10分→袖ヶ浦BT10時05分着

※高速バス ダイヤ変更のため、新宿発は平日午前のみ運行となりました。

【午後】

□電車の方

- ・ 上り電車の方(快速逗子行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」13時05分着
- ・ 下り電車の方(千葉駅発木更津行き)
JR内房線「袖ヶ浦駅」12時50分着

□バスの方

【土日祝】

- ・ 品川発12時00分→袖ヶ浦BT12時52分着
- ・ 横浜発12時00分→袖ヶ浦BT12時46分着
- ・ 川崎発11時30分→袖ヶ浦BT12時32分着
- ・ 東京発11時40分→袖ヶ浦BT12時35分着

【平日】

- ・ 品川発11時50分→袖ヶ浦BT12時42分着
- ・ 横浜発12時00分→袖ヶ浦BT12時46分着
- ・ 川崎発12時00分→袖ヶ浦BT13時02分着
- ・ 東京発11時40分→袖ヶ浦BT12時35分着

各種お申込み連絡先

曹洞宗 真光寺 〒299-0201 千葉県袖ヶ浦市川原井634
TEL. 0438-75-7414 (代表) / 0438-75-7365 (縁の会事務局)
FAX. 0438-75-7630 Email. ennokai@shinko-ji.jp (縁の会)

瓦谷山だより

発行日 2026年2月20日 / 発行人 真光寺 岡本和幸
印刷 現代社 / 編集 真光寺
問い合わせ先 真光寺 TEL. 0438-75-7414 (代表)
Webサイト <https://www.shinko-ji.jp/>